

極楽島綺譚 北川冬雄の超現實風の手記 : 創作

著者	中井, 正文
雑誌名	龍南
巻	2 1 7
ページ	4 9 - 7 9
発行年	1931-03-01
その他の言語のタイトル	極楽島綺譚 北川冬雄の超現實風の手記 : 創作
URL	http://hdl.handle.net/2298/7015

極樂島綺譚

——北川冬雄の超現實風の手記

中 井 正 文

フ ロ ロ ー ケ

土曜日は、私達がアラビヤン・ナイト倶楽部へ集合する日だつた。その晩、本郷の沖山男爵邸で、さうやかな晩餐會が催された。招待されたものは私とアメリカより新歸朝の混血兒テノール華田ジョージだけだつた。その席上で、沖山は、氣輕に

「私の親友で、小説家である北川冬雄君」

「アメリカ留學當時、お世話になつたテノール華田ジョージ君」

と云つた風に紹介した。私達は立ち上つて目禮したゞけだつた。第一印象で私はこの男に好意が持てなかつた。映畫の二枚目をやらして見たいやうな美男子。アメリカ趣味か、なんだかしらないが、油でてかく光るカツラのやうな髪、色男然と短く刈り込んだコールマン型の鬚。胸のポケットに、半ばのぞかした絹のハンカチには、香水が浸ませてあるらしく、ブンと薔薇油の匂ひが漂つた。

併し、彼の頑丈らしい肩や胸や、高い身丈は幽かな威壓の念すら起こさした。

春江嬢は、淡紅色のイヴニング・ドレスで現はれた。そのドレスは、色々な寶石で刺繡がしてあるらしく、シャンデリヤの鈍

い光線にさへ、眩しいほど豪華に輝やいた。その露はの、豊かな胸に、垂れ下つて居る首飾りの房には、小指大のダイヤモンドが燦然と閃いた。純白のクロースの張られた食卓の上へ、最後の果物とワインが運ばれて來た。私は眞紅の林檎にぐさつと銀のナイフを切り込んだ。

華田ジョージは立ち上つて、グランドピアノの前に坐つた。そして黒人の有名なテノールが、トーキーで唄つて、一躍世界的に流行した、ニグロの民謡を奏き初めた。暫時すると、無遠慮に、澄んだテノールを響かし始めた。私は、何十年も貯藏された古いワインを飲み干しながら、今宵の夕餐がどんなに楽しかつたかを、しみぐと反芻した。食事をすますと、私達は二階の、大理石のバルコニーに面した、沖山の書齋へ上つた。

私は、沖山とマガホニーの小卓を挟んで、安樂椅子に坐つた。春江嬢は私の隣りの長椅子へ坐つた。春江嬢は、その斷髪が私の頬に觸れそうになるまで、コケツチシユに私の方へ身をくねらした。コティな香水の芳香に混じつて、幽かに鼻を衝く若い女の体臭が、私を悩ましくし、幸福に溺らした。春江嬢は、どちらかと云ふと、憂鬱な、思索的な兄の正彦に比べると、全く性格が反對かと思はれほど、著しい對照を示して居た。

明るく、朗かで、良い意味のモダン・ガールだつた。女學校時代テニスのチャムピオンとして鍛へた彼女の身体は、若鹿のやうに輕快な動作を示した。

彼女の兄である、若き男爵沖山正彦と私は、大學時代、同人雜誌『白潮』を發行して居た當時より、無二の親交を繼續して來た。その當時、春江嬢は幸福な、童話の國の女王だつたが、私は彼女に、虹色の夢の愛情を捧げつゝ、彼女の成長に、希望と期待をかけて居た。そして、今、この美しく成熟した、十九の娘が、私の希望と期待に全く背かなかつたことを心から満足した。私は新鮮な林檎のやうな、この處女の愛情を愉しんだ。

遂に、彼女の軟い、いたづらな髪は私の頬に觸れた。正彦の側に坐つて居た華田は、荒々しく立ち上つて、バルコニーへ通ずるドアを開いた。正彦は、眠つてゐる男のやうに、黙つて、天井を嘖めつゝ、ハバナのシガーの煙りを思ひ出したやうに吐き出し

て居た。彼は、そのまゝにしておけば、半日でも沈黙して居る男なのだ。大方彼の頭の中では、最近彼が多量の犠牲を拂つて蒐集の中に加へた、ルノアールの裸体畫の夢が渦巻いて居ることだらう。私は立ち上つて、バルコニーへ出た。初夏の夜氣は、アルコルに上氣した頬に快かつた。庭園の樹々の葉はしつとりと露を含んで、しめつばい呼吸を續けて居た。樹々の葉越しに、街の灯を透し見ると、たまらなく美しく、なんとなくまだ見ぬ天國のクリスマス・ツリーを思はせた。

星月夜だつた。無數の天上の星は、幾億の地上の灯と、光りを争つた。遠い、街の灯は星と全く區別がつかなかつた。地上では、流れ星よりも、遙かに繁く、自動車へのツド・ライトが流轉し、交錯した。廣大な邸宅地域が全く、大都會の音響を斷ち切つて居るので、こゝから眺めると音響を伴はない、都會の活動はスクリーンの世界のやうなもの珍らしかつた。

暖かい、重い腕が私の肩を壓した。ギョツとして、振り向くと、現實の世界に、いつの間にか後ろに猫のやうに忍びよつた春江嬢の妖艶な微笑と、その肩越しに、華田ジョージの鋭い視線とを、夜目にもしるく發見した。

書齋の鳩時計が九時を知らせた。アラビヤン・ナイト俱樂部へ集合する時刻だ。それに今晩は、沖山と私で、華田を、新入會員として他のメンバーに紹介しなければならぬから。私達は地階のガレージへ急いだ。春江嬢はドレスの上へ、緑色のオーペを着けて、少し遅れてやつて來た。首と袖口の部分に、フカブカとつけられた純白の動物の羽毛が、微風にしとやかにゆらめいた。やがて、パツカードが引き出された。沖山は運轉手臺へ。私達は、春江嬢を中にして、後部車室へと乗りこんだ。人通りの少ない。廣壯な邸宅街のアスファルトの舗道の上を、自動車は少しの震動も受けず、流れるやうに走つた。春江嬢は、眠りかゝつたやうに、私の肩へ凭り縋つて來た。軟い、窮屈な壓迫の下から、右手を抜いて、そつと彼女の軟い肩を抱いてやつた。骨格の存在を示さない豊かな肩。斷髪の襟足は美しい。私はネツキングをしたい衝動に驅られて來た。彼女は突然顔をあげた。ベティ・アーマンの細く長い書き眉の下で、大きな瞳がいたづらそうに笑つた。いつのまにか、私の膝の上で、彼女の白い手が眠つて居た。

私はチラツと、華田の方を眺めた。彼は隅に、窮屈そうに坐つて、窓の外を眺めて居た。彼の心中が、おだやかでないことは

想像出来る。私は恥しくさへなつた。

東大前から、上野廣小路を廻り、須田町から、日本橋へ出ると、幸福なブルジョア娘はハンドルを把つて居る、兄に銀座を通つて行くやうにと注文した。

夜の銀座！プロムナードに、ふさはしい初夏の夜。街路樹はしつとりと、涙ぐんで、ネオン・サインの華かな洪水。人道を交錯する無数の人間の群。シツクなボルサリノ。張りきつた白ストッキングも美しい。斷髪。ショート・スカート。私語。微笑。無邪氣なウイंक。幸福なランデブウ！そして、皆んな一つの波となつて、輕快に移動する。まるで不幸の抹殺された風景だつた。

アラビヤン・ナイト俱樂部については、會員として絶対に秘密を守らねばならぬ。麻布の異人町に近い五階のロマンスク風のMビルディング。私達の車はそのまゝ入口を通過する。廣大なガレージ。そこは、自動車陳列場である。ナツシユ。コロンビヤ。ハドソン。パツカード。マアモン。リオ。もう二〇臺以上の車が集つて居た。少し遅すぎたかしら？

私達は、一番奥の階段を下つて、地下二階へと急ぐ。薄暗い通路。廊下は曲りくねつて居る。アラビヤン・ナイト俱樂部の入口。私達は無言で、胸の銀の會員章を示す。門番は丁寧に敬禮する。

廿世紀の、而も帝都の真中に、こんな秘密俱樂部の存在することは、一見不思議なやうで決して不思議ではない。あらゆる獵奇的末、刺戟に飽いたブルジョア達。享樂と、戀愛遊戲の外には、生き甲斐を感じぬ有閑婦人達。強烈な刺戟と放縱な安息所を求めるデカタン藝術家。〇〇會員のメンバースは、百人を越えて居るに違ひない。こゝでは、浮世の道德觀念などは、微塵も發見されない。これでは、あらゆる放埒な人間の慾望を自由に満たすことが出来る。

ホールは澱んで居る。煙草の煙りと、香料の香りと、人々の囁きで、發酵しそうな雰圍氣である。高い天井。豪奢をこらしたシャンゼリヤ。シツクな壁紙。中央に人工の池があつて、ギリシャの女神を象徴した大理石像の据ゑて居る壺から、冷たい噴水が迸つて居る。ホールの處々には、色々な綠葉植物の植込があつて、その蔭々を利用して卓子、安樂椅子、長椅子が設置して

ある。上品を以つて自らを任ずるこの人には決して高聲で話したり、無作法に哄笑したりしない。

私達は壁の側に席を取つた。壁には色々な額が飾つてある。現代佛蘭西の若い人々の畫とか、日本の二科の新進の人々の名前も大分見られる。そうかと思ふと、外國の映畫俳優の寫眞なども見られる。私の側には、どうして手に入れたのかグレッタ・ガルボのあられもない裸体寫眞が吊されてある。

シャンペンを抜く愉快な音や、コップのカプチリと觸れ合ふ音が盛んに聽える。

沖山と私とは、華田ジョージを伴つて、中央の壇に上つた。先づ沖山、それから私が簡單に華田ジョージを新會員として紹介した。華田が最後に挨拶した。このアメリカ仕込のモダン、ボーイは短い言葉の間にも、軽いユーモアを混じて、ホールに幽かな歡聲と笑聲をおこさせて居た。挨拶が終ると、人々の中から眞紅のイブニング・ドレスが立ち上つた。

S子だ。富豪N氏の未亡人。社交界の女王。妖婦。卅に近いのに、若い處女のやうに、眞紅のドレスを纏うて居る。S子は華田を引つぱつて彼女の卓子へ歸つた。男の新會員があると、先づ誰よりも彼と友達になるのはこの美しい孔雀だ。

私達の卓子へ、ウエイトレスがやつて來た。斷髪。日本の振り袖。唇は小さく赤いハート型。

「シャンペンを。それからこの女に何か弱い酒を。」

と、靜かに、タンゴの曲が始まつた。噴水の周圍の廣々とした所で、幾組かのカップルがステップを踏み始めた。

私は春江嬢に誘はれるまゝに彼らの群に加はつた。左手で彼女の腰を軽く抱いた。

踊りつゝ、私は人の中に、S子の殊更に誇張した背線美を見つけた。彼女の顔とすれ／＼に、華田の笑ふ顔があつた。

電燈がパツト消えた。私は春江嬢の耳許で囁いた。

「僕はね。タンゴが一番好きなんですよ」

「えゝ、だから今晩は踊りぬきませうね」

春江嬢は、私の胸に顔を密着した。

明りが灯いた。曲が變つた。アルゼンチンタンゴの、而もアイ・アイ・アイ！やがて伴奏が終つた。私達は疲れて元の卓子へ歸つた。沖山がじつと考へ込んで居た。彼の前の灰皿には、葉卷の灰が堆高く積つて居る。

「どうして君は踊らなかつたのだ？」

「なあに、踊りたくなかつたからさ」

若い貴族は、この場の空氣に全く相應はしくないほど、靜まりかへつて居る。

「ハハア。今晩は君のリーベが見えて居ないんだね。A氏のお嬢さんが——」

私は、いつも沖山の相手をして居る。洋畫の泰斗A氏の美しいお嬢さんの居ないことに氣付いた。

ウエトイレスが小さな紙片を卓子の上に配つて行つた。今晩十二時から、奥の小ホールで、露西亞娘のインチキ・レビウと、ちよつとした映畫會のあることを告げるものだつた。

私は健康で、美しい露西亞娘の裸体を頭の中に描いて居た。あまり興味もおこらなかつた。

映畫つて、先日そのやうに、オブシェーンな、殆んど若い令嬢らの見るに堪へないものに違ひない。先日の映畫は巴里で秘密に作られて、秘密に吾が俱樂部に買ひとられたのだつた。それは、獨逸や佛蘭西の著名の女優達が澤山出演し居たので少しは興味もあつた。今思ひ出しても、赤面するほどの恰好で。私はもう一度プログラムを見た。いかゞはしい題名のロシヤ映畫がバラマウンツの「南洋の風光」と組み合せてあつた。

突然、ほんとうに突然、瞳を輝かして

「おい—どうだ。僕らは一つ愉快な旅行をしようではないか。素晴らしい旅行を」

と、沖山が言ひ出した。沖山は、狐につまゝれたやうな私と、丁度戻つて來た華田とを無理やりに奥の彼の私室に引っぱりこんだ。

そして、彼は昂奮して語り出すのだつた。

中途で、春江嬢が這入つて来て、兄の話を聴きながら、

「まあ！ ロマンチックな兄さんね」とか、「兄さんはやつぱり立派な浪漫詩人だね」とか、ひやかしたが、沖山は平常の物靜かな態度にも似ず、快活に語り續けた。

彼の話を綜合すると、なんでも大學の三年生の春、彼が小笠原諸島へ旅行した時、伊豆七島の三宅島と八丈ヶ島との間で、非常に印象深い小島の側を航海したのだそうだ。

丁度、夕暮れ時だつたので、碧い南國の海は、夕焼に眞紅に染められて居た。そして、その美しい、靜かな波間にたつた一つ置き忘れられやうに小島が浮んで居た。周圍一里もないやうな小島。緑の樹々が繁茂して、背部は中世の古城の城壁のやうな絶壁に全く圍まれて居た。勿論地圖に載つて居ない小島なのだから、無人島であらう。赤く輝く空。赤く光る海。そして、赤く煌めく島の絶壁。その美しさは斷然筆舌の盡すところでない。その當時、その島の印象は決して彼の胸裡を去らなかつた。

其の後、幾度となく憶ひ出す度に、彼の想像の中で、益々美化されて、彼はその島を現實の極樂島であるかのやうに、狂信的に思ひ込むに到つたが、長い年月の間に次第にこの島のことを忘れて居た。ところが今晚、大ホールで壁に飾られた畫や寫眞を、何氣なく眺めて居ると、彼はベツクリンの「死の島」の複製を見出したのだ。すると、直觀的に、三年前の薄れた記憶が蘇つて來たと云ふわけさ。一度憶ひ出すと、もうたまらないやうな心持が湧き上つて來た。と言つたやうな話だづた。

私は、靜かに、瑞西の近代畫家ベツクリンの「死の島」を頭の中のスクリンに寫して見た。

海は澗み、風も死んだ。太陽の光りの全く訪れぬ孤島。目に入るのは、古城の城壁のやうな絶壁と、鬱然と茂つた木々。この沈黙の荒涼たる風光！

沖山は、私があり、黙りこんで冥想に耽つて居るので

「だがね。勿論兩者の印象は全然異なるのだ。「死の島」が死を象徵とすれば、その島は生を象徵して居ると云つた風にね。とて

も美しい魅力ある島だった。」とつけ加へた。

彼は尚饒舌に語り續けた。ところでね。私は是非その島を一度訪れて見たいのだ。殊に今、私は夏の海洋の旅を切望して居るんだからね。ほんとうのことを云ふと、私はこの俱樂部にも、飽きて來たのだ。こゝは、お金と暇をつぶすことに苦心して居る、ブルジョアの狸親爺や、不良マダムの巢窟になつて來た。とても健全な青年達へ、長い間新鮮な魅力を保たせることは出来な
う。

淫奔な年増女のやうなものだ。最初は物珍らしくても、直き飽きて、物足らなくなつて來るにきまつて居るのだよ。非常に生眞面目な青年や、昔流の道學者達にこの俱樂部の内幕を見せたら、きつと氣絶してしまふだらう。誘惑。姦通。賣春。恐喝。墮胎とか云ふ、いまはしい犯罪が公然と行はれて居るんだからね。創立以來十年の歴史を持つこの俱樂部も随分、墮落したものだ。どうだい。僕達三人では非旅行しやうではないか。清新で、健全な刺激を求める爲にね。こんなところに、長い間生活して居ると、遂には道德觀念に無感覺な變態になつてしまふやうな氣がする。明るい南國の大海原を憧れて居た私には、願つてもないチャンスだ華田田も行動を共にすることを約した。その上、春江嬢の同行の切望が非常に私を喜ばせた。

極樂島の生活

1

第三者の幸涉を防ぐために、私達は秘そやかに準備を整へ初めた。船の方は、沖山が俱樂部の幹事と交渉して、横濱に繋いである俱樂部の遊走ヨットを借り受けることとなつた。ヨットと云つても、補助機關を具へて十六節を出す優秀船なのだ。食糧品。飲料水。テント。衣服類。食器類。家具類。書籍。著音器。小型映寫機。など、あらゆる必需品が積み込まれた、若し氣に入つたら一ヶ月でも暮せるやうに、充分に準備されて居た。

吾らのシエラザード號は七月の第一日曜日に、こつそり横濱を出帆して、四人の若人と三人の水夫とを乗せて、きまぐれなシ

ンドバットの航海に出た。

幸福な航海だった。海は静謐だった。風は微風だった。太陽も軟く燃えて居た。シエラザード號は、日暮れまで、鰯群の隨行を受けた。

三宅島で、ほのぼのと夜が明けた。

太陽は斜四十五度に上つたが、未だそれらしい島影は見えなかった。若し、私が沖山の平常を知らなかったならば、その島の存在も彼の妄想ではなかったかと、疑つたに違ひない。

緑色の海の連續である。

突然、船首で、熱心に双眼鏡をいじくつて居た春江嬢が

「島が見えるわ！島が——」

と黄色い聲で叫んだ。

甲板で、日向ぼつくりしながら、とりとめのない雑談に耽つて居た私達三人は、慌てゝ彼女のところへ集つた。

お人好しの船長がハンドルを把つたまゝ顔をのぞけた。

「あの島ですよ！きつと」

船は南に針路を變へる。

リズムカルなエンジンの響と共に、島は大きくなつて来る。その島こそ、まぎれもない吾等の憧憬の目的地だった。

「妙だね——」

双眼鏡で、じつと眺めて居た沖山がそう呟いた。

私が沖山から眼鏡を受け取つた時に、

「家があるわ、赤い屋根。美しい家だわ。」

と春江嬢が啼いた。

船が島に近づくに従つて、私の期待が決して破れなかつたことを知つた。高い城壁のやうに、すらりと後部に連る茶褐色の絶壁、その絶壁は今明るい卵色に光つて居る。青い松林。疎らかな椿の森。その間に、二階建のスマートな洋館が見える。赤いスペイン瓦。ゴシック風の大きな玻璃窓。煙突からは青い煙さへ昇つて居る。

どちらを見ても十方無礙の青空と海原。

麗らかな、白金のやうに明るく、物靜かな風景である。

船は、島から廿間ばかり沖合で碇泊した。淺瀬へ乗りあがる恐れがあるからだ。甲板から海中を覗きこんで見ると、淺く、海草のゆらめくや、魚類の泳ぎ廻るのが、透明な海水を通して手にとるやうに見える。

「ねえ。こんな無人島に住んで居るなんて、海賊ではないかしら?」

春江嬢は心配そうに兄の横顔を覗き込んだ。

「ハハハ……まさか!海賊としても、随分優しい海賊だらうよ。あんな美しい家に住んで居るなんてね。」

その時、二階の鰐戸がスラスラと開いた。固垂をのんで、貰めて居ると、藍色の服を着た若い女の姿が現はれた。

「ますます以つて現實ではないね。お伽話の世界だよ」

上氣嫌で華田が私の肩を叩いた。

私達がボートで島に近づく間中、その女は渚に立つて、ハンケチを振つて居た。

ザザザ……ボートは淺瀬に乗りあげた。春江嬢が眞先きに飛び下りた。

「マイ……良くいらつしやつたわ。でも何しにいらつしやつたんですの?」

女は明瞭な日本語できさくに訊ねた、春江嬢が簡単に理由を話した。「マア!」と呟きながら、女は沖山を見上げた。沖山は慌て、丁寧な帽子を脱いだ。次に女は視線を私に注いだ。女の顔に瞬間、感情の色が動いた。

「あなた、北川さんではありませんか？」

私はこの未知の而も美しい令嬢に、顔を見知られて居る光榮にどぎまぎした。

「ええ、そうよ！小説家よ。こちらは華田ジョージさん。テノールの唄ひ手よ。これは妾の兄です、ああ。それから妾沖山春江つて云ふの。どうぞ宜しく」

春江嬢が快活に、でしやばつた。

その女と春江嬢は十年の知己であるかのやうに手を組み合つて歩んだ。

その女は、どうも混血兒のやうに思へた。黒いけれど、カールした斷髪。彫刻のやうな高い鼻。殆んど私ほどもある身の丈。

白く艶やかな健康な皮膚。

洋館に入口に、五十がらみの、血色の良い上品な西洋人が立つて居た。彼は、優しく微笑んで私達を歓迎した。一とほり握手をすまずと簡単な自己紹介をした。その西洋人は、娘ほど日本語は流暢でなかつた。時に、娘は父に通譯しなければならなかつた。

西洋人はペトロ・ゴンザレスと云ふ、西班牙人だつた。彼女は思つた通り混血兒だつた。ピラルとも、又母方の姓を取つて小松原笑子とも云つた。

ペトロ・ゴンザレスの食堂で心づくしの茶話會があつた。その席上彼は、松林中のバンガローをお貸ししたいと申し出た。私達は大喜びで彼の好意を受けることにした。その茶話會を通じて、色々彼らの身の上知ることが出来た。

ペトロ・ゴンザレスは、上海で化粧品の會社を経営して居た。ピラルは、小學校へ入る時分から、両親の許を離れて、東京の伯母さんの許で、日本の教育を受けて來た。

革命で上海が物騒になつて來た時、妻を失つて、失意の境遇にあつたペトロは、思ひ切つて、會社の經營を米國人に譲り、はるばる東京の娘の所へやつて來たのだつた。美子の世話になつて居た伯母さんは八丈島へ移轉した。その途中にあるこの無人島

が、ひどく親子に氣に入つて、物好きにも、借り受けて別荘を作つたのである。一ヶ月以前から、彼らは此の島で暮して居た。夏の真中まで暮すつもりである。

「私ねノス、タルジャにかかつちやつたわ。東京戀しいわ。銀座が懐かしいの、お友達も懐しいわ。何と言つても、ここではお父さんと、番人のお爺さん夫婦だけよ。まるで流し人よ。ほら、鳥も通はぬ八丈島へ、と言つた風ね」

ピラル嬢の饒舌は人々を笑はせた。

卓子の上へ、二冊の私の小説集と、數冊の私の創作載つて居る雑誌とをわざ／＼運んで来て、

「あたし、女學生時代から貴方の愛讀者よ。こうして會へるなんて夢のやうだわ。ゼニヨール」

と言はれた時には、なんだか嬉しかつた。母屋から二町も離れて居ない、バンガローへ、船より荷物は全部移された。そうしてゴンザレス親子と知つた上からは、少しも心配は要らないので、一ヶ月後の再會を約して、シエラザード號を歸航させた。

2

愉快な島の生活が始まつた。八時頃、熟睡から目覺めると、森の井戸で顔を洗つて、珈琲とバタ、焼麴麴で軽い朝食をすまずと、いつも三人で、時には美子嬢やンゴザレス氏まで加へて、散歩するのである。私達は、バンガローの少し裏手に、椿の茂みで隠されて見えないが、小さな入江のあることに氣付いた。

白い渚には、ゴンザレス氏の所有にかかはる小型のヨットが繋いであつた。赤い三角形の帆。入江は可愛い岬によつて、二重に抱かれて居た。湖の様に靜かだつた。

海岸から絶壁まで二町ばかりあつた。絶壁は半分も發れないほど險しかつた。

入江に注いで居る、水の涸れた小川を發見して、水源を求めて、遡ると、小川は曲りくねつて、五町ばかりの奥の椿の林の中の小さな泉に盡きて居た。直徑五間ばかりの泉。水は透明だつたが、底は見えなかつた。鏡のやうに靜まりかへつた水面に、椿の青い葉と、その茂みの間にちよつぱり覗いた青空と、が映つて居た。僅かに生きて居るものは、雲の影ばかりだつた。いかに

も、水の精とか、泉の主とかの住んで居りそうな泉だつた。まだ色々の珍しい發見があつた。絶壁が海中にまで、突出して、とても徒歩では、島の向ふ側に廻れぬこと。絶壁は、安山岩、花崗岩、流紋岩から成り立つて居ること。渚には、色々珍らしい美しい貝殻が轉つて居て、春江嬢を歡ばしたことなど。それから、入江を抱く一雙の岬がずつと入り交つて、岬と岬との間が幅三間位の水道を保つて、川のやうに、十數間續いて居ることや、この島の西部が、珊瑚礁の淺瀬に連つて居ることなど、随分私達を歡ばせた。午前は散歩か、讀書に過した。午後になると、南國の初夏は熱いので、入江で暮すのである。春江嬢と美子嬢は眞紅の海水着で踊り廻る。二人とも、白い均整のとれた、ピチピチ跳ねる健康な肉体美の持ち主だ。

女學校で水泳の選手だつた美子嬢のクロール・ストロークは素晴らしい。瀬戸内海の漁村で育つた私と、入江の端から端まで競争することになつたのだが、私のコースは目茶々々になつて、彼女の体に衝突し、縄りあつて、ゆつくりと、規則的に水を掻く彼女の白い腕は、ピッチの早い、亂暴な私の腕より前に進み勝ちであつた。私は直ぐ疲れて來た。彼女の白い胸に追ひ抜かれ彼女の腰のあたりが私の頭を越した。彼女の足によつて、おこされる水の泡が、私を旨にした。私は途中で浮び上つた。そして彼女の足首を掴んで彼女を引きとめた。私は肩で呼吸した。

「マア、男の癖に——」

「でも——」

明らかに笑つた。彼女の小さな、丸い胸が大きく揺れて居る。沖山と華田がヨットで迎へに來た。

「君の御自慢のクロールつて、なんだか、はかないものだね！」

沖山がひやかした。

「なあに。レディには勝ちを譲つてをく方が結果が良いのだ。ねえ、セニョリータ」

私は、美子嬢を押し上げてヨットに乗せてやつた。實に愉快な生活だつた。こんな生活が已に十日續いたけれども、少しも倦怠を感じなかつた。

この島へは週に一度づつ、八丈島から發動機船が、食物や其の他を満載して通つて來た。その度毎に私達は新鮮な牛肉や魚や野菜や果物にありついた。

ゴンザレス氏は度々私達を晚餐會に招待した。明るいランブの食堂の卓子の周圍に集つて、雜誌に耽つて居ると、明るい時分から、料理の本と首引きで用意した、御馳走を春江嬢と美子嬢が運んで來る。どうしても皿が不足なので、その中には罐詰の空で我慢しなければならない。美味しい夕餐。食後に、キウランの壘が持ち出される。乾杯！プロジツト！女達のキャツキャツ喧ぐ聲は、部屋を氣分を、この島の白晝のやうに明るくする。

華田ジョージが、アメリカのジャズソングを唄ふ。美子嬢がギターを弾きながら、ラバロマやアイ・アイ・アイを、華かなソプラノで獨唱する。騒ぎ廻つた揚句は、卓子を隅に片附けて、蓄音器のレコードに合せてダンスが始まるのである。私は春江嬢を華田は美子嬢を抱きながら、ステツプを踏む。

華田が、戯れに美子嬢の頬ぺたにキスして。美子嬢に頬を叩かれたりした。

「ハハ……それは面白い！」

ゴンザレス氏までが、若返つたやうに、哄笑した。十一時を過ぎて、私達は彼らに、おやすみ！を告げて、星影を浴びて、バンガローに歸つて來るのである。そんな晩は昂奮して、仲々眠れなかつた。卓子に凭つて、煙草を喫ひながら、じつとして居ると、遠くの方から幽かに波の音が聞えて來る。

夜更けにしんみりと聽く海の音は良いものだ。

窓を展くと、明るい星月夜である。快い微風が吹き込む。輝やく星屑は、今にも銀の雨となつて地上へ降り濺ぎさうだ。昂奮が靜まると、こんどは、妙にしらじらしい哀愁が流れて來る。

「寂しくなつて來たわね！」

ほんとうに、寂しさうな表情で、春江嬢は私の肩に縋り付く。私も、強く彼女の弾力に富んだ背を抱いて、彼女に愛情を感じる。快活なジョージまでが元氣がない。

而し、一夜がどうにか明けて、朝が訪れると、以前の快活な私達となる。

晝になると、洗濯物が面白いほどよく乾く。松から松へ、針金を廻して、洗濯物をかける。暫時すると、私のパンツに、春江嬢のレース縁のズロースに、華田のワイシャツが仲良く並んで、微風に踊つて居る。

三日に一度位、夕立が訪れた。猛烈な夕立だ。周囲が全く水のカーテンに包まれる。直ぐにからりと晴れ上つて、西の空では未だ太陽が笑つて居る。ほんのり、東の空に虹の橋が浮んで居る。

4

この極樂島の生活が、私の春江嬢に對する古くからの愛情を迅速に發酵さすと同時に、私の生活に急に飛びこんで來た美しい混血兒のピラル嬢に對する氣持がより急激に變化して、今は二人に對して、私は公平に二等分された愛を感じて居るのである。

私は、同時に二人の女を戀して居る。明らかに私は戀して居る。

而し、私は何方をより多く愛して居るのか？さう考へると、私の頭は全く混亂して來る。いや、どうかすると、早熟な、情熱的なピラル嬢が、白く妖しい肉体から發散さすイットに、たまらないほど心を亂されることがある。

春江嬢と一緒に居る時には、彼女を愛し、ピラル嬢と一緒に居る時は、彼女に強い愛を感じる。春江嬢について、うつとりと想像して居ると、いつの間にかピラル嬢と混線して來て、何が何だかわからなくなつて來て、愕然として覺醒する。例へば、夢の中で、ピラル嬢を見るとする。朝になつて見ると、何時の間にか、春江嬢であつたやうな氣がして來る。眞剣になつて、考へれば考へる程、二人の像が、フラツユ・バックの連續のやうに、速かに交互に、ちらつて、結局全く混亂して切ない氣分に來る。皆んなと一緒に話して居る時、春江嬢に話しかけやうとして、無意識にピラル嬢の名を呼んで、ハツとまごつく。一人の男性が、同時に、等しく二人の女性を愛し分けるなんて、嫉妬深い神様がお許しにならないのに違ひない。

白書。そろそろ暑苦しい時となる。私は午睡の沖山と華用を残して、バテイベビーを携へて外に出た。春江嬢はと見れば、木蔭のハンモックにしどけない好恰である。讀みかけのコクトオの詩集が、開かれたまゝ胸の上にのつかつて、彼女の安らかな呼吸と共に、仄かに揺れて居る。水色の富士絹のスカートが、くしやくしやにまくれ上つて、薔薇色の脚が片方、太股のところから、外に垂れ下つて媚かしい。私は温い、重い脚をそつとかゝえて、ハンモックの中に入れてやつた。

天使のやうに、安らかな寝顔！キツスしたくなる可愛いさ！

一人で居る、入江の眞晝は、あまり明るくて、わびしい。動くものとは、葦に似た細い植物が微風に、ありなしに慄いで、鏡のやうな水面に、縮緬の風漣が風の方向を示して起るだけである。風死して。全く音響の絶えた入江で私は恍惚となる。

ヨットの赤い帆を點景として、渚と、松林と、白雲との織り出す、軟いニュアンスをカメラに収めたい。ぼんやり坐つて考へて居た私は、後方に忍び足に迫る幽かなる聲を聞きつけた。

春江嬢か？ピラル嬢か？いたづらな小娘に違ひない。私は、爆發したい笑いを嚙み殺して、待つた。空然、私の兩眼が兩手で蔽はれた。軟い丸い腕！、春江嬢かしら？

私は兩腕を後ろに廻して、しかと兩脚を抱いた。裸の股。ピリピリと震動が走つた。ピラル嬢に違ひない。兩腕に力をこめて引いた。

ドスン！快よい響をたて、肚快到肉塊は、砂の中にめり込んだ。

『ヤー。ひどいわ。ひどいわ！』

怒めしうに、ピラル嬢はお臀をさすりながら立ち上つた。眞紅の海水着一つのピラル嬢。瞞めて居る中に、私の頭に良案が浮んだ。

「美ちゃん。お願ひだから、カメラの前に立つて呉れ。向ふのヨットを背景にね」

私は後の思ひ出のために、是非ピラル嬢をフィルムに収めて置きたいと思つた。

ピラル嬢は快よく、私の願ひを聞き入れた。

ピラル嬢は、冗談半分にカメラの前でダンスのステップを踏み始めた。

「もつと、もつと野蠻に。脚をあげた」

監督は昂奮して叫ぶのである。

ピラル嬢も自分の踊りに、昂奮して來たらしく、野蠻に輕快にエロチックに、どんなレビウ・ガールより痛快に踊り狂つた。

若い監督兼撮影技師は、クラシクを廻しながら、少々あてられる。

やうやく二百呎の撮影が終ると、私も裸かになつて、水の中へ飛び込んだ。私は潜水して行つて、彼女の脚を引っぱつて、彼女を水の中に倒す遊戲に變態的な興味を増した。無人島の入江で、私達はあらゆる原始人の痴態をくり返した。暫時して、私はピラル嬢を横に抱いて淺瀬を渚へ歩んだ。しつこい、粘り壓力を兩腕に感じながら、私はふと、アメリカの映畫雜誌のステルに南洋の海を背景に、逞しい男が、白人の女を抱いて、海から上つて來る光景のあつたことを思ひ出した。私は始めて、ピラル嬢の唇に接吻を盗んだ。

松の木陰に、軽い疲勞を覺えて、私はぼんやりと睡氣を感じた。ピラル嬢は、春江嬢のハンモックから、盗んで來たらしい、コクトオの詩集を開いた。何分経つたか知らぬ。何時間過ぎたかも知れぬ。私は搖り動かされた。懶い私の網膜にうつゝたのは春江嬢の刺すやうに鋭い瞳だつたので、驚愕した。春江嬢は、女性のための持つ鋭敏な直觀力で、私のピラル嬢への愛情を悟つたに相違ない。

「オヤオヤ吾々を出し抜いてランデブウとは洒落れたな」

沖山は、春江嬢の手前罪のないユーモアに、お茶を濁しな。ピラル嬢は無邪氣な應酬で對戦したし、春江嬢も、心の動きを聰明さに包んで、決して表情態度に表はさなかつたけれども、私は春江嬢との間にひどく氣まづい氣分の流れたやうな氣がした。

その後の春江嬢の態度ときたら、全く不可解だつた。最初の中こそ、氣の故だと諦めて居たが、次第に露骨になつて來た。私の目にあまるやうになつて來た。

例へば、今まであんなに度々私の名を呼びかけて、罪のない雑談の、相手とした彼女が、全く北川の北とも、口に出さないものである。

よし、私が話しかけても、最も簡單な返事で、すげなくごまかしてしまふのである。

今まで、戀人のやうに、私に捧けられた、全身的の好意は、どうやら、輕薄な華田ジョージに移轉したやうな氣がする。彼女は私の前で、わざと、甘やかすやうに、歌を唄つて呉れとか、ジョン・ギルバートやグレタガルボがどうの、ジャネット・マトクドナルがシャンだとか、とりとめもなく、しゃべつて、華田ジョージの膝にしなだれかゝるのだつた。

すると、華田はつけ上つて得意さうに、目を細くして、彼女の小さな手を弄りだするので、私はひどく氣まづく、憤然として戸外にとび出すのである。すると、後から、春江嬢の明るい笑ひ聲と、華田のテノールとが一緒に混じてどこまでも私を追つて來る。

沖山ときたら、まるで仙人のやうに冷たく、人の戀愛遊戲なんか關つては居られないと云つた態度なので私は全く心細かつた。ビラル嬢が居るんだから、思ひきつて、あんなブルジョアのお轉婆娘は讓つてやらあ！と大きく櫛へて見るものゝ、春江嬢が來た少女だつた頃の思ひ出とか、それから五年以上の長い交際の間に、色々起つたケースなどを思ひ出して見ると、バスするのは非常に口惜しかつた。

極樂島の生活も、少しも、愉快でなくなつた。島の空氣が明るければ明るいほど、私は憂鬱の暗闇に陥ちこんだ。

夕立の過ぎ去つた、涼しい夕方だつた。春江嬢と二人だけ、パンガローに残されて居た。私は、決して春江嬢に付いて全く絶望しては居なかつた。私は出来るだけ自然な調子で彼女を風呂に誘つた。春江嬢は格別反抗しなかつた。黙つてついの來た。

私は何か話題を見つけやつと焦慮した。こんな時、仲々適當な話題は見つからぬもので、とう／＼、私達はゴンザレス氏の許

まで、一言も語らなかつた。

ピラル嬢が、木立の陰まで、野天風呂を引き出して、身体を洗つて居た。白い肩から、膨れ上つた胸にかけて、緑葉の鈍い反射が無数の光點を作つて居た。

「今晚は。セニヨリータ。莊観ですね——失禮を許して下さい」

私は、滑稽な身振りで、お辭儀した。

「おや、おや。セニヨール。仲の素晴らしく良いところを見せて、やかせるわね！」

ピラル嬢は、裸かでも、元氣旺盛だつた。

二人の間に水をさしてやるのだと、手で水鐵砲を作つて、水を散らした。私のズボンと春江嬢のスカートにバラバラと散りかゝつた。

「美子さん！亂暴すると、風呂桶をひつくりかへしてやるよ」

私は、冗談に怒鳴つて、笑ひながら同意を求めるやうに、後を振り返つて見ると、春江嬢の顔が蒼白で、目ばかり血走つて、小刻みに口を顫はしながらじつと私を睨みつけるので、私はハツと吾に返つた。

私とピラル嬢との、あまりぞんざいな會話が彼女の心を傷けたのだらうか？それとも、女性の敏感な神経が、内在的な何物かを嗅ぎ出したのであらうか？

私は、彼女の突然の不機嫌さに、全く當惑してしまふのだつた。

その夜、私は頭痛を感じたので、早く床に就いたが、夕方の春江嬢の冷たい眼とか、ピラル嬢との關係とか、或ひはもつと以前の、春江嬢が私に捧げた愛情の数々とか、春江嬢に付いての古い思ひ出とかを、靜かに思ひ浮べて見ると、どうやら、私と春江嬢との間にはいつの間に宿命的な連鎖があつて、ピラル嬢には氣の毒だが、ピラル嬢は平和な樂園の妖蛇の役を受け持つたやうな氣がして來た。

そうすると、南歐的な、情熱的な妖婦型のピラル嬢に軽い憎悪すら覚えて反對に、春江嬢が、たまらなくいじらしく思へて、激しい思慕の情さへ起つて來た。併し春江嬢の近頃の態度に思ひ到ると私は全く寂寥を感じるのだつた。

どうしても、睡眠に入ることが出来なかつた。色々な雜念が、メリー・ゴウ・ラウンドのやうに、後から後から連續して、私の疲れた神經を悩ます。強いて眠らうと、焦れば、胸の動悸が激しくなつて、私を脅かす。

私は遂に狂人のやうに起き上つた。そして春江嬢の鋭い視線を後ろに感じながら、そのまゝ戸外へ飛び出した。目的もなく、無心に彷徨して居る中に、私はゴンザレス氏の家の近所まで來て居ることに氣付いた。

私は、大きな蘇鐵の茂みの蔭から、盜賊のやうにこつそり顔を出した。彼女の寢室に灯が未だ點つて居た。

「美ちゃんはまだ起きて居るんだな」

私は思はず二三歩茂みを離れた。

ふと、私は芝生に、小さな動物の氣配を感じた。その方へ忍び足に近づくと、鈴がリンリンと響いた。

「彼女のペットに違ひない！」

そう呟きながら、私は足を早めた。人に馴れて居る小さな黒猫は容易に私の腕に拾ひあげられた。

私はその黒猫を彼女にかへすために、芝生を斜めに横ぎつて、彼女の寢室の窓に近づいた。音のせぬやうに忍び足で。

窓邊でじつと耳をすますと、スプーンと皿の觸れ合ふ訝えた音が聞えて來た。

私は、小猫の首の眞紅のリボンに附いて居る鈴をならして見た。何の反應もなかつた。

「美子さん！」

唇をガラスに觸れるやうにして、小聲で呼んだ。黒い影が大きく玻璃窓に映つて搖れた。

窓が開いて、バジヤマ姿のピラル嬢が現はれた。

「マアーセニョールだつたの」

ピラル嬢は、この夜分の突然の訪問に、少し昂奮して、聲をはづませた。

「夜分に寢室を訪ねるなんて、失禮しました。」

ピラル嬢は、それには答へないで、

「なんて美しい星月夜なんだろう！」

感傷的にそう云ひながら、窓に腰をかけて、片足をだらりと下に伸ばして、片足を曲げて、その膝を両手で抱いて空を仰いだ。淡い星明りを宿して、夜目にもくつきりと白い顔を噴めて居ると、神々しいまでに美しく見えて来て、どうしたことか、抱擁して接吻してやりたいやうな激しい感情にまで驅られて来た。

「今、珈琲が沸いて居るから、おあがりにならないこと。」

彼女は、どうやら私を寢室に引き入れそうな形勢なので、私は慌て、彼女を庭園に誘ひ出した。

私は靜かに、彼女を抱かへて、庭へ下ろしてやつた。薄い絹のパジャマ一枚の彼女は、直接に裸かの肉体に觸れたやうに、セキジュアルな惱ましきだつた。

私は、いつか一抹の不安を感じ始めた。不安は夕立雲のやうに、私を包んだ。

(若し、こんなところを、春江嬢か沖山に見られたら万事休すだ。どんな深刻な邪推をされても、私達は少しも辯解することが出来ない。そうしたら、春江嬢に對して、抱いて居る一縷の希望も永久に消えてしまう！)

「美子や！」

彼女を呼ぶ、ゴンザレス氏の優しい聲が聞えて来た。私はそれを機會に、無理やりに、彼女を寢室の窓の中に押しこんで、木陰を、猫のやうに走り去つた。

私の彷徨の目的は自然海邊に向つた。

月は満月で明るかつた。樹々の葉が、渚の砂が光つて居た。地上を乳色の和やかな霧のやうなものが降り濺いで居た。第二歩

アイオリンの合奏のやうな波の音が渚に溢れて居た。波が白金のやうに輝いて居る。海も明るい。水底の淋しい魚類まで見えう。月光の降る海邊は追憶的な風景である。哀愁を抱く若人には、美しすぎる、あまりに哀しすぎる、堪へきれぬ。

いまは、はやしんから寂しくなつて、青色の感傷を持てあました。歌ふことも出来ぬ。詩を作することも勿論出来ぬ。まして、狂人のやうに思ひきり哄笑することも忍びぬ。

海邊のこの夜の神聖は、華田ジョージのジャズの唄に破れた。テノールは次第に近く響いて来る。私は渚傳ひに来る二つの影を見付けた。

「あの人はきつと此處へ来て居ると思ふんですわ。美子さんの所に居ないんですもの」

春江嬢の囁く聲が聴えた。

「あんな男なんか諦めた方が良いでしょう。私が貴女の良き友達になつてあげることが出来るでせう。」

華田の太い聲が不快だつた。

「でも——ええ、ありがたう——ジョージ貴方の御親切だけは感謝しますわ」

「せめて、早く、今晚にでも感謝の方法が聞かして貰ひたいね」

急に、ぞんざいな聲が重々しく抑へつけた。

「失禮ですね。何んてことを言ふの——ジョージ。不愉快ですわ。少くとも、こんな美しい晩に！」

「冗談はよして下さい。わざ／＼僕を此處まで引き出してをいて、一体どうしろつて言ふんです。君はどうもしないにしても僕には考へがある。」

ジョージの野獸性がそろ／＼現はれ出した。

木蔭に隠れて居る私の動悸が激しくなつた。私は全身が緊張と憤怒とに震へ出した。

ジョージがいきなり、春江嬢の腕を荒々しく掴んだ、春江嬢は、一生懸命になつて抵抗した。白い渚のスクリーンの上に二つ

のシルエツトが組れ戦つた。

「バカー ケダモノ！ 失禮な！ 日本娘はヤンキガールと異ふことよ。」

春江嬢の聲は速度の興奮と憤怒に顫へた。

ビチャリー ジョージの頬が鳴つた。ジョージの逞しい右腕が、彼女の首に捲きついた。かよい女は、今や驚に捌つた鳩のやうに、徒らにもがくだけだつた。

ジョージの汚らしい唇が赤く燃えて近づいた。春江嬢はもう叫ぶことも出来なかつた。苦しい擦音が僅かに喘いだ。

私の煮えくり返つた激情の中に、義侠的な野蠻さが爆發した。
蓄生！ 私は後ろからジョージの首に跳びかかつた。不意を打たれて、ジョージの偉大な身体は、春江嬢を抱いたまま倒れた。何を！ 滿面憤怒の色に染めて、ジョージは猛牛のやうに立ち上らうとした。併し、私のフットボールで鍛へた脚が迅速に弧を描いた。

ジョージは、胸のあたりを抱へて、よろ／＼と立ち上つた。私の捨身の鐵拳が、下顎をつきあげた。偉大なる体格は痛快に砂にわり込んだ。今度は容易に起き上らなかつた。唸りながら、だらしく泡を吹いた。

私は勝つた。奇蹟的に容易に私はこの大男を斃した。私は振り返つて春江嬢を見た。

併し彼女の姿は見えなかつた。

私は全く狂ほしくなつた。私は極度の興奮に我を忘れた。

ふと、霧の降る渚を走つて消えて行く彼女の後姿が瞳に映つた。夢中で私は彼を追つた。渚の上は走りにくかつた。幾度か私は躓いて倒れた。

私の追撃は相當の距離續いた。

遂に私は春江嬢に追ひついた。私が彼女の肩を捕へやうとした時、彼舊は突然振り返つた。

どこに隠し持つて居たのか、彼女の右手には小型のブローニングが光つて居た。月光を眞面に浴びて、彼女の顔には血の氣が全くなかつた。肩が大きく波うつて居た。

「春ちゃん!! 私を撃つ氣なの?」

私の心臓は破裂しそうだつた。私の頭腦は粉碎しそうだつた。

「あゝ! わなし! わたし——」

春江嬢は崩れるやえに、砂の上に沈んだ。

私はそつと彼女をかゝへ起した。彼女は氣を失つたやうに抵抗しなかつた。

今こそ、私は彼女を愛して居ることをはづきり悟つた。愛情が嵐のやうに湧き上つて來た。彼女は瞳を大きく開いて、私を睨めた。

私はその中に哀願と煩悶の色を見出した。私は、今はもう堪へられなくなつて來て、彼女の額に、頬に、唇に接吻の雨を降らした。不圖私は背後に聲音を聞いて、ハットして顧みた。

あゝ、ピラル嬢が立つて居る。一言も發せず。大理石像のやうに冷たく立つて居る。大きく見開かれた瞳が光つて居る。私の狂亂した頭の中に、色々な想像が狂ひ廻つた。

ピラル嬢は、私が彼女と別れた時から、こつそり尾行して居たのではないだらうか?そして、春江嬢と華田ジョージとの嬉遊?を、木陰に隠れて見て居る私を、木陰に隠れて見て居たのではないだらうか?

そして、夢中で春江嬢の後を追ふ私の後を二重に追つて來たのではないだらうか?

私は理性を失つた。私は抱いて居る春江嬢を砂の上へ投げ出すと。狼に追はれる兎のやうに、林の中へ盲滅法に逃げこんだ。

木の小枝や、棘が私を引き搔いた。

どこをどう走つたか、やうやく私はゴンザレス氏の家の灯を見つけ、扉を割れるばかりに叩いた。

「寢巻姿のゴンザレス氏が、ランプを持って現はれた。ゴンザレス氏は驚いて、直ぐ様私を横抱きに抱へると、軽々と二階の寢室へ運んで、ベットの上にそつと寢かした。

コップに葡萄酒を満たして、私の口に注ぎこんだ。激しい渴を覺えて、私はガブ／＼と飲み干した。ゴンザレス氏は、傷の手當をすますと、わざと理由も訊ねないで、室を出た。

私は、死ぬ程の苦痛に戦きながら、終夜展轉と煩悶した。私はこのまゝ狂人になるのではないかと思つた。さもないと、私は死ぬるに違いないと思つた。

6

恐ろしい夢ばかり見つゞけた浅い眠りから覺めた時、明るい陽ざしは白いシートの上まで這ひ上つて居た。頭が空虚のやうな氣がした、身体中の筋肉がダクリと伸んでしまつたやうに、懶かつた。

隣室から男の聲が聞えて來た。

沖山だ！ 私は蹣跚きながら隣りの部屋の扉を排した。

「北川！ 昨夜の冒険は少し危険だつたな」

この親友は總べてを知つて居ると云つた顔付で、愛撫するやうな微笑を浮べつゝ、双手を擴げて私の不安定な身体を支へた。私は質問したいことが澤山あつたが、何から訊ね初めて良いかわからぬので、口をもぐ／＼魚のやうに動かすばかりだつた。

「昨夜十一時頃華田が一人で、ヨロ／＼と歸つて來た。ゴンザレス氏の家へ行くと云つて二人に出て行つたのに、春江が歸らず、華田の方が歸つて來たので少し不安だつたが、春江はきつと美子さんと夜更しでもしてるのだらうと思つて居た。華田がものを言はないで、直ぐ様寢室へ這入つたので、こいつは妙だなと思つたが、奴さん酒に酔つぱらつて、その勢で春江にモーションをかけて、脇鐵砲食つたな、春江は随分勝氣なお轉妾娘だからな。

ところが、卅分ばかりすると、春江が歸つて來た。髪が亂れて、顔が蒼白で、ドレスがしわくちやになつて、まるで魂の失せ

た人形のやうな無氣力さだ。

これはいけない！ 困つたことが起つたぞ！ 不吉な、不快な場面を想像した。

すると彼女がやうやく顔を上げた。涙が頬を流れて居る。平常の春江にも似合はない。どうも芝居がゝつて居る。その内ひどく心配になつて來たので、彼女を抱いて、戸外に連れ出し、やうやく一部始終を聞いたのさ。

随分面倒臭いことが起つたのたね。さしづめ、ヴァン・グイクつて男の屢々作る南洋活劇つてところだね。併し春江と君が主演者なんて驚いたよ。随分登場人物が多かつたね。

僕は、さしづめ華田と春江のメロドラマで、醜い愛慾の葛藤かと思つて、ひどく心配だつた。まあ、春江がヴァジンだつたので安心したわけさ。モウパッサンの言ふやうに、月光は若い男女にとつては魔物だつたからね。

それにしても惜しかつたね。折角撮影機があつたのだから、豫めこの監督に話があつたら、醜い情痴の世界に溺れて居る俱樂部の紳士淑女に新鮮な情涼劑を献上することが出來たのに。ハハハ……」

私が呆れかへつてしまふほど、この若い男爵は屈託なしに、饞舌を弄した。ゴンザレス氏には始終ニコニコ微笑んで、葉巻をふかして居た。この部屋の空氣は明るすぎた。私は昨夜來の重荷が少し下りたやうな氣がした。殊にジョージが一人で歩いて歸つたと聞いて安心した。

正直なところ、私は殺人罪を犯してしまつたのではないかと恐れて居たから。

さて氣にかゝるのは彼女達のことだ。

「春江さんはどうした？」

「春江は、氣分が悪いと云つて、下の美子さんの寢室に寝て居る。どうだい！ 會ひに行かうか？」

「いや。會はない方が良いだらう。少なくとも當分の間は——」

私の聲は語尾で顫へて消えた。

「そうか……」

沖山は葉巻の灰を、灰皿に叩き落した。

「ゴンザレスさん。失禮ですが、美子さんは？」

「美子はその、矢張、頭痛がすると云つて、下に寝て居ますが——」

老人は、云ひにくそうに解して、眼をパチ／＼させた。

私は淋しい氣持がした。私は二人の女を愛して、二人共失つた。

「それはそうと北川。ゴンザレスさんの話によると、二つ島の平地が五万坪位あるそうだ。充分だよ。僕らのユートピアの建設には持つて来いだ。歸つたら早速俱樂部のお金の使ひ場所に困つて居るブルジョア達の間同志を募らうではないかね。この緑の小島に、赤いスペイン瓦の並ぶ風景は美しいぞ。」

私は沖山の眞意をはかりかねた。この男はどこまで眞面目で、どこまで冗談なのか？

「冗談はよして呉れー君達シユールレアリスは、人間の感情なんか顧ないと云ふのか。」

「北川、怒つたのか？ハハ……」

私は答へないで、窓邊に近づいて、更紗のカーテンを上げた。

「おい、沖山ー見えるぞーシエラザード號が」

なつかしいシエラザード號は、今蕭洒な身体を沖合に横たへやうとして居るところだつた。

一ヶ月経つたのだ。私はこの島で一ヶ月夢を見つゞけて居たのだ。私は早くこの島を去りたい。この島に居れば居る程、私は氣が狂いさうだ。

結局私だけがこの島を去ることになった。今私は華田に顔を合はすことを好まなかつたし、丁度二週後にゴンザレス一家が東

京へ引きあげるの、沖山と春江嬢と華田は彼らと同行することになった。

海の遙かに見はらかせる明るい食堂で、私と沖山とゴンザレス氏は、トーストと、珈琲と、果物で最後の晝食をすませた。この明朗たる、夢見勝ちなロマンチックな島に罪はない、私はいよく別れるとなると哀愁に襲はれた。

私達の間に最後の乾杯が行はれた。ゴンザレス氏が私に囁いた。

「若し貴君が世の中が面白くなつたらこの島へやつていらつしやい。私達は貴君達を心から歓迎ませう。いや、貴君をこの島の王様とせんとも限りませんぢや。ハハハ……」

「それは、ゴンザレスさん。一体どう云ふ意味ですかね？」

「なあに、私にも一人娘が居ましてね。娘は年頃、丁度女王様に相應しい。ハハツハ……」

ゴンザレス氏は、この罪のない冗談に哄笑した。

7

私は目の中が熱くなつて来て、この老人の無骨な手を碎けるばかり握りしめた。

シエラガード號は抜錨した。三度うら悲しい汽笛をあげた。彼女の極樂島への訣別の合圖なのだ。沖山とゴンザレス氏はいつまでも海岸に立つて居た。今はシエラガード號は青い海原を波を蹴つて行進する。

極樂島が遠くなる。私は出帆の時からゴンザレス氏の家の窓に全身の注意を拂つて居た。ピラル嬢の寢室の窓に。併し遂に窓は開かなかつた。

二人の女達が私を見送つて呉れなかつたことが、どんなに私の心を悲しませたことか。今はほんとうに彼女達は私を去つた。

私は一人淋しく航海を續ける。東京へ歸つたら、先づ伊香保か草津かへ行かねばならぬ。温泉の湯で私は、神経衰弱を洗ひ

流さねばならぬ。

私はもう一度極樂島へ最後の視線を投げた。出帆の時、東の水平線にもくくんと膨れ上つて居た黒雲が太陽を蔽うた。又雨か、私は増々憂鬱に沈む。

極樂島に照らして居たあらゆる光線が遮断されると、何と極樂島が不吉な憂鬱に包まれて來たことか、太陽の光りに全く見離なされた孤島。

荒涼たる絶壁と陰鬱な黒ずんだ樹々の葉。

海の色が濁つて來た。微風すら吹かぬ。

ベツクリンの「死の島」そのまゝだ。

極樂島は己に半里近くも離れたらう。私の双眼鏡はピタリと孤島の上に静止した。

その時、少し移動した、レンズの中に絶壁の一部が映つた。見える！黒い人影が！

私はあはてゝレンズを調節した。

女だ！青い服！ハンケチを振つて居る。春江か。美子か。

感情が嵐のやうに錯亂した。いらいらしい心臓の鼓動を感じた。私の全神経は眼に集中された。

春江嬢に違ひない！いやピラル嬢のやうにも見える。

私の指は顫へながら、無茶にレンズを調節した。瘤だ。どうしても識別出来ない！

私は双眼鏡をデツキへ投げつけた。そしてズツク張りの長椅子の上に身を投げた。

春江嬢だとしたら？彼女は私を愛して居るに違ひない。彼女が華田に示した好意だつて偽りにちがひない。唯私の愛情を蘇らせやうとする、勝氣な女の無邪氣な手段だつたかも知れない！そうだ、それに違ひない。

彼女は華田の接吻に抵抗した。ちつ晩だつて、彼女がいぢらしい媛姍のあまり、華田を誘ひ出して、私の後を尾行しやうと思

つたのかも知れない。きつと、彼女は私を愛して居る。私の憂鬱な心の奥底から喜悅が湧き上つて來た。

だが併し美子嬢だつたら？あの女が美子嬢なかつたと誰が斷言し得よう。

私は再び奈落の底へつき落される。美子嬢は本氣で私を愛して居たらうか？

それよりも、私こそ眞面目に彼女を戀して居たらうか？少なくとも、春江嬢に比べて私は彼女をより以上に愛して居たと斷言出来るか！

私は一体どうすれば良いのだ！最後に於ける女性の不意の出現は、私の心を搔きむしつた。一層私は心の平靜から遠ざかつたのだ。

私はじつとしてはゐられなかつた。私はもがいた。そして甲板の上へ轉げ落ちた。激しく後頭部を床に打ちつけた。

氣が遠くなるやうな氣がした。聲を發することも出来なかつた。私の身体は、僅かに残つた神經の命令に全く謀叛した。

仰向けに、それた龜のやうに、私は甲板に倒れたまゝもがいた。

私の顔にバラバラと六粒の雨が降りかゝつた。續いてエラザード號は豪雨に洗はれ始めた。私は、陸上へ置かれた金魚のやうに、口をパク／＼動かしながらいつまでも太い雨脚に叩かれた。

エビローグ

こゝで、親友北川冬雄の超現實風の手記が終つて居る。北川冬雄はモノマニヤ的な傾向を持つてゐた。この手記はあまり芝居がかつてゐるが、果して全部事實だらうか？幾分の偏執的な彼の想像乃至幻想が混じてはならない居うか？併し、全く彼の創作とは云へないだらう。何故なら北川冬雄は實力ある作家だ。こんな不味い小説は決して作らないに違ひないから。すると案外眞の手記かも知れぬ。

沖山男爵のユートピア建設の計畫については、全く噂がない、勿論男爵が冗談に言つた言葉たらう。誰だつて、こんな荒唐無

稽な夢が成功するとは思はないだらう。

それから、一昨日のY新聞の文藝欄の人事消息を見ると、皮肉にも、テノール華田ジョージのアメリカ歸朝と並んで、沖山男爵の結婚豫告が出て居る。相手の女は小松原美子嬢若し、北川の手記が事實なら、疑ひもなくあの混血兒だ。これは面白いメロドラマクの筋書通りの進行だ。而しあまり奇妙すぎる。

最近の北川の私信によると、健康全く回復して、目下懸命執筆中とある。彼が山の温泉へ引籠つてから一月に近い。

きつと立派な作品を持つて歸ることだらう又彼は東京へ歸り次第君に僕の婚約者を紹介すると言つて居る。どうやら、その女性こそ春江嬢であるやうな匂ひがするのだが、若しそうだったら、北川がいつも冷やかすやうに、この手記を信用した私は少し好人物過ぎたやうな心をする。何にせよ、北川が歸り次第私は彼に泥を吐かすつもりだ。